

2019 年 12 月 17 日 A グループ 石崎

山家悠紀夫『景気とは何だろうか』岩波新書 2005 年

第 5 章 「構造改革」と景気

○問題提起

「『景気の自律的拡張のメカニズムが壊れてきた』ことを見た。昨今の『構造改革』政策はその壊す作業に加担し、壊しを加速させているとも言えるのである」(P158 L1) とあるが、この構造改革を良い方向に持っていくためにはどのようにすれば良かったのだろうか。

○選んだ理由

第 4 章から見てきたように、2000 年代からの構造改革が「景気の自律的な拡張メカニズム」を壊す政策となってしまった。第 5 章でもこの構造改革について指摘されているので、この章のトピックである構造改革をどのようにすれば良かったのかと疑問に思ったから。

A

まず、企業が正社員を増やし、労働者の待遇が変わることで労働力そのものの質が上がり、優秀な社員を地域に派遣することで地域間格差が縮小する。ここまでの一連の動きに対し小さな政府を作ることで極力介入を減らし、この結果、好循環が生まれる。

B

非正規社員を無くしたいが、企業の正社員に対する社会保険料が増えるため、実現不可能。そこで非正規社員の上限を作ったり、待遇をよくする。地域間格差の縮小は財政的に考えて難しい。

C

規制緩和などにより市場競争が激化してしまい企業間格差が拡大したことを踏まえて、官営から民営に移行する際に段階を踏んで行なうべきだった。

D

停滞分野が経済資源を抱え込んでいる事と、成長分野に必要な資源が供給されない事を政府が誤認し構造改革を行ったことから、景気の自律的拡張メカニズムが壊れた。そのため、この誤認が生じないようにする必要がある。AI システムを応用し、正確な認識ができるようにする。